

書く)を活用している点に注目すればよいのです。この論理が十八世紀の日本が生んだ哲学者三浦梅園の「一即一」の論理にまで発展すれば、「アジア共同体構想」や「世界の宗教統一」を推進し実現するための哲学的中心核になり得るのであります。(拙著『三浦梅園の思想』・ペリカン社刊・参照)道教系の単語や熟語で注目すべきものは、「仙薬」「書シテ以テ吞服ス」「不死ノ薬」「長生」「長生ノ呪」等であります。不老不死・不老長生を目標とする仙術と仙薬の追求は、西洋医学の限界を補完するために、二十一世紀へ向かってますます強く要求されてくるであります。

七 結語

東学運動が天道教という韓国自生の宗教を生み、北からの清国、西からのヨーロッパ、南からの日帝という外敵の攻略から祖国を守るべく戦った歴史的事実は評価されねばなりません。結果的には同志の裏切りにより、日帝売弁政府に鎮圧されましたが、民族の危機に際して、これほどに伝統思想・伝統宗教の長所を有機的に化合することによって、新思想と新宗教を生み出し、かつ、それを武器に内外の敵と敢然として戦った歴史的事実を低く評価してはなりません。

この時代までは、確かに「西学」と「東学」は排他的に争いました。しかし、完全性を象徴する球の形状を有する一個の地球を、仮にノコギリで西半球と東半球に切断してしまつたら、地球は生命を失って暗い宇宙の果てに落ちてゆくであります。さらに南北に切断して四分割すれば、悲劇は激化するのみであります。ここに要求されるのが、私が専門とする三浦梅園の「一即一」の調和論哲学であり、文鮮明師が創出された「正分合」の調和論哲学であります。

セッションⅣ

アジア共同体構想と宗教統一のための キリスト教の機能



鄭慶均(チヨン・キョンキュン)

一九三六年生まれ。

ソウル大学卒業後、シカゴ大学大学院を経て、東京大学で博士号取得。現在、ソウル大学教授。専攻：保険社会学。

〈主著〉

『保険 Communication 論』、『保険社会学』他。

一 序論

題目があまり膨大である。「アジア共同体構想」一つでも膨大な課題であるが、その上に「キリスト教的立場での宗教統一」というまた別の命題が与えられたためである。本人の専攻は社会学であるので、ただ宗教社会学の立場からキリスト教の機能に焦点を合わせて、この命題を消化するようにした。そしてこの論文の方向性の定立は、次のような四つの前提に立脚した。

第一に、キリスト教は一方的に西欧文化に基づいているという点。

第二に、キリスト教の母体である西欧文化自体が病んでおり、それに基づいたキリスト教はあまりに固陋であるという点。

第三に、現代の国際社会は、程度の差異はあるものの、どの地域でも、洋の東西、昨日と今日の文化が重疊(cultural overlap)しており、価値判断の基準が曖昧であり、価値失調でさまよっているという点。

第四に、古代、中世、近代および現代社会を支配してきた世界的宗教がキリスト教、仏教、ムスリムおよびヒンドゥー教であるとするとき、これらの世界的宗教の極東との因縁が疎遠であり、中国、日本、韓国はアジアにおいて極めて重要な比重を占めていながらも、世界的宗教を誕生させずという点などである。

特定の宗教は、特定の社会文化的背景を持っているという点は至極常識的な事実であるために、これに関する別途の論拠は必要でないと見るのである。従って、本論題に対しては、以上の四つの前提を基として、現代社会

の社会文化的状況とキリスト教の機能上の問題点の根源が何であり、その解答をどこで探さなければならぬかという方向から接近することにした。

なお、この論文の流れを要約すると次のごとくである。

第一に、今日のキリスト教が果たして現在の状態から(Christianity as such)アジア共同体の形成と宗教統一に貢献し得るか否かという側面を省察し、

第二に、もし貢献し得ないとするならば、その理由は何であり、どのような点を補完したらよいかという側面を扱うこととしたのである。

二 現代キリスト教の諸問題の根源

(1) 西欧文化の運命と機能

西欧文化がいれば現代社会の特徴を養成してきたということは事実であり、その背後でキリスト教が機能したという点は、ウェーバー(M. Weber)の言葉を借りるまでもなく厳然たる事実であると見ることができよう。そうであれば、西欧文化が果たして今日と明日の世界をもちこたえられるかという点は別個の問題である。

シュペンゲラーは既に、「西欧文明の没落」を予言したが、その文明の没落は多分に文化の没落までも内包している。西欧文化の特徴を実用的かつ合理的な面にあるとしながらも、それがどうして没落する運命にあるかは大変深刻な問題である。西欧文明の没落を予言しながら、その視線を東洋に向けたシュペンゲラーの分析も大変

意味深長ではあるが、深奥で宗教的直観を持った東洋文化からその解答を探そうとした西洋人はいくらでもいる。

例えば「東洋においては、宗教人の最大の目標は、時代的継承と宇宙の変化に隠されている全宇宙の総合にある」と看破したキャンベル¹⁾や、「東洋の宗教的伝統を理解するためには、ものものしい心情の原理と相当な水準の虚心坦懐な境地が必要であること」を指摘したフレイジャー²⁾をはじめとして、「西洋的思想は通俗的であり、客観的であり、また公認された手順による確認を指向するのに反して、東洋的思想は宗教的直観と霊魂的総合の実現を指向している」と見たジンマー³⁾等は、確かに宗教的現象と関連して、西洋文化よりも東洋文化を優位に見たことは事実である。

また彼らは、西洋文化の劣等性だけを指摘したのではなく、そのような西洋文化に基づいたキリスト教それ自体をもちり込んでいる。

ニーチェや同じくジンマー⁴⁾も「キリスト教会員はその行いにおいてだけではなく、個人的希望においても、非キリスト教会員と何ら異なる点がない」と誹謗するほどに、西洋文化やそれを背景としたキリスト教は、伝統的・西欧文化の温床にのみ安住する限り、現代社会の抱えている諸問題に解答を与えるだけの力を持っていない。

現代キリスト教は世界第一の宗教としての位置を占めているが、イエス以降二千年が過ぎた今日までも、それが伝播した地域の分布やそれが収容した世界人口の比率を見ると、まだまだ限定されているという事実を発見することができ、その母体である西欧の社会や文化圏内においてすら、宗教としての機能が弱体化しているという事実は、大変深刻な問題であるといわざるを得ない。

宗教と社会と文化は互いに不可分の関係にあるという主張を疑いなしとして受け入れるとしても、これを具体

的にキリスト教と社会と文化という観点から極東の三国に照明を当ててみると、問題は少し異なってくるであろう。すなわち、日本は東洋でも社会、文化的に最も西洋化していながら、キリスト教は極度に微弱であり、そうかと思えば、キリスト教を受け入れた韓国は、日本と比べてもっと少なく西洋化したし、また中国はキリスト教や西洋化からはまだ遠い彼方にあることを見るとき（もちろん共産主義という理念の障壁のためでもあるが）、現代キリスト教(Christianity as such)の伝播力や世界性には相当な疑問が提起されるのである。

キリスト教の究極的目標が神の創造理念、すなわち地上天国と天上天国の実現にあり、それが社会文化的に力動的機能を持っていたとすれば、キリスト教はより強力な伝播力を持たなければならぬ。またそれ自体やそれを胚胎した文化が伝播された地域や集団や個人においては、キリスト教が主張する創造理念がたとえ少しづつであつたとしても実現されなければならぬにもかかわらず、それとは反対に、キリスト教やその文化を収容した社会において、どのように歴史が前進しているのか、あるいは後退しているのかを分別しにくくなるということ、相当な自己矛盾ではないであろうか。

これは、キリスト教の社会文化的機能の上で何か問題があるからである。その問題の根源は、それを胚胎した西洋文化の偏向性から探さなければならぬと考えられる。キリスト教が文化の障壁、体制の障壁、理念の障壁を越えて拡散することのできる強力な浸透力を持つためには、東洋文化の土壌から再培養される必要があるのではないだろうか。アーネスト・トレルチは「キリスト教と西洋文化はあまりにも不可分のに絡み合っているので、他の文化の下にいる人たちに、キリスト教会員として自分の信仰をそのまま話してやることができず、また他の文化の下にある人は、彼自身が西洋世界の一人にならなくては、キリストについて話すことができない」とまで

言ったのである。

(2) 西洋文化自体の病理とキリスト教の固陋性

「現代世界を悩ます社会内および社会間の問題の多くは、それらの沈黙と陳述形態の多くを、キリスト教的な価値の制度化過程に負っている。それらをめぐる苦悩は、キリスト教の制度化の歴史的な影響の程度ではない。」(T・パーソンズ)³⁾

文化は確かに生成しまた死滅する。ただし一つの文化が萎むとき、その文化にはいろいろな病理が発生することも歴史を通じてよく経験されてきた。今日、西洋文化が病んでいるという点を指摘する人はあまりにも多い。新教の倫理は資本主義を可能にした。経済、保健、教育の向上と、市民権と機会の均等、さらに個人および集団結社の自由と自律性など、すべての価値あるものの向上において、キリスト教が絶対的に貢献したということは確実なる事実であり、右で引用したパーソンズの指摘のように、現代の西欧的社会のすべての社会問題が、キリスト教の歴史的な影響に起因すると分析するものも少なくない。しかし、このようにすべての社会問題の責任をキリスト教に追及するのは穏当ではない。

キリスト教は確かに歴史を通じて貢献してきたし、今も貢献しているのは事実であるが、そのような過ぎ去つた日のキリスト教の機能が弱化的にすることに問題があると見るのが正しいであろう。

そうであるとすれば、現代キリスト教がなぜ多くの社会問題についてそのように懦弱であり、機能を果たさなくなつたのかを問わざるを得ない。

西欧文化に留め置くことができなほど膨満した社会問題は、産業化、都市化、大衆社会化過程で不可避免的に発生する問題であり、同質の社会問題は、西欧社会に非常に追いついてきている東洋社会でも現れているが、それに対する解決策は発見されていない。

成長の背景となった西欧文化自体が病んでいるために、その中でともに成長してきたキリスト教自身も病んでいたと見るのは誤りであろうか。現代の世界が抱えているすべての社会問題に対して、世界第一の宗教であるキリスト教が処方を出すことができなかったら、人類の希望は挫折するしかないし、現存する他のどんな世界的宗教にもその解答を要求することは難しい。仏教も、ムスリムも、ヒンドゥー教も、その処方を持っていないように見える。なぜならば、これらのすべての宗教は年を多くとっているし、その出発の背景となっていた社会と文化が今日の社会文化とは全然異なるものであったために、そのような固陋な宗教は、形を変え改革されない限り、現代社会の諸問題については何ら貢献することができないであろう。

一言で言えば、今日人類が持っている世界的宗教は、あまりにも古く無気力である。これらがこのように古くなるまでの二千年の間、どうしてこれらを統合して対処する宗教が出てこなかったのかと考えると、不可思議に思える。キリスト教だけを見ても、旧約時代（ユダヤ教）から新約時代（キリスト教）を経て、十六世紀に生きたルター（一四八三―一五四六）とカルヴィン（一五〇四―一五六四）以来、旧態以前とした内容で、なぜ革新しなかったのか疑問である。

十六世紀の社会文化と今日の社会文化は全く別個のものである。そのために、今日のキリスト教が力動的な機能を尽くすためには、現代社会を基として一大革新の陣痛をなめない限り、それ以上人類の宗教として受け入れ

られるのは難しいであろう。

宗教の社会学的分析に貢献したデュルケムは、一八五八年に出生して一九一七年に死亡した。当時の社会だけを見ても、今日の社会とは大いに異なっていた。それにもかかわらず、彼は「すべての神はあまりにも老いたか、または既に死んだために、他の神が出現しなかった」と指摘しながら、ヒューマニティへの案内のための新しい理念と新しい公式が形成される創造的余分の日が臨むことを予言したのである。

「神が死んだ」といったニーチェの主張も、このような脈絡から理解することができるであろう。社会と文化は止まっているのではなく常に変わっているために、昔の予言者の教訓に従って行おうとしても、そのような現象は現社会にはなく、また適合しない場合が数多くある。故に真理とは、すべての時代を通じて人類に一度だけ現れる絶対不変のものではなく、新しい社会、新しい文化の進化とともに成長するのであり、クライド・クルックホーンの言うように、時代にふさわしく、われわれの経験を豊饒にする「Design for living」を提示することができるように、初めてその宗教は実存世界(“as it really is”)に適用することのできる力動的機能を發揮することができようであろう。

(3) 文化重疊と価値基準の喪失

今日の世界は程度の差こそあれ、どの社会も東洋と西洋、昨日と今日の価値が重疊している。そのために価値の基準が曖昧になって、社会は極度の解体現象を露呈している。このような文化重疊という重要な要因は、通信と運輸の発達によって急速かつ広範囲に現れてきており、その上に世界人口の都市化と、また産業化の拡散によつ

て、今日の社会、文化的状況は、二十世紀後半に入って全く別個のものとして展開されている。

それに反して、キリスト教をはじめとした世界の大宗教は、すべて農耕社会をその背景としており、人口が膨満した今日の都市社会での秩序と人間関係の類型を全く想像することができない状態で形成されたために、現代社会が抱えている問題に処方を出すことができないのである。

文化重疊の様式には、混合、保存、折衝、総合、分裂、統一などいろいろな段階と様式がある。それらは各社会とその時点によって程度を異にしているが、他の文化による一つの文化の克服ではなくて、他の文化に照明された自己文化の反省と、新しい価値、新しい固有の文化の創造によって、その中で矛盾を克服してゆくこともできるが、その過程では、価値基準が喪失させられるほかはない。今日の世界、社会はちょうどこのような過程で呻吟しているのではないであろうか。

世界が共通して経験しているこの文化重疊の問題を解決するためには、どれか一つの文化による他の文化の克服という方向から解答を求めようとするよりも、それらを総合して統一するという方向から解答を求めよう方がより賢明であると考えられている。

このように見ると、過去に西洋で花を咲かせたキリスト教を東洋文化によって復活させることを通じて、世界や社会が抱えている諸問題の解決を試図する方が賢明であり、また最も可能な努力ではないかと考えられるのである。このような発想はあまりにも我田引水的であるかも知れないが、今日の西洋文化の影響による諸般の社会文化的な問題の核心をのぞいて見ると、それは相当な可能性を示唆するものであると見られるためである。価値には中心価値(Central Value)と周辺価値(Peripheral Value)とがあるが、中心価値は主に信念(Beliefs)

や家庭規範として構成されていると見ることができよう。この中心価値が揺れるとき、社会文化的現象に大きな動揺が起こる。今日の諸般の社会問題中最も原初的なものは、家庭倫理の無力化ないしは破綻にあり、これが今日の社会解体の具体的かつ直接的な原因となるのである。

キリスト教が個人の解放と救援に貢献し、神の国の建設を主張したことは、大変積極的な貢献であったが、具体的な家庭倫理や神が宿り得る家庭の建設等に関しては、多少等閑であったと見るほかはない。イエス自身が独身であったし、使徒パウロもなるべくならば結婚しない方がよいと言いつつ、また離婚を禁じながらも例外条項をおいており、父母を敬え、子女を愛せよという極めて抽象的であまりにも当然な教えのほかには、家庭倫理の重要性を指摘した内容は聖書全体を通じてみてもあまりに少ない。

今日のキリスト教が、家庭破綻で特徴づけられている現代社会の問題に対して処方を出すことができないという点と、今日の世界が抱えている最も中心的な社会問題が、キリスト教の成長した西欧的特徴を持っているという点は、われわれに相当な何かを暗示していることが出来る。西欧文化の特性に比して、東洋文化の核心は忠と孝で構成されており、個人と個人、個人と家庭、個人と国家の秩序を分明に叙述しながらも、どこまでも家庭が中心となっている。

従って、現代のキリスト教は、今日の社会文化的な諸問題を治癒しようとするれば、家庭倫理に対する福音を再整理して提示しなければならず、そうするときに初めて、世界的宗教としての機能を果たすことができると考えられるのである。

(4) 極東の文化と人口の比重

中国、日本、韓国を中心とした極東では、いまだ世界的宗教をつくりだしたことがなかった。またどの世界宗教も本格的には受け入れないまま沈黙だけを守ってきた。キリスト教は世界第一の宗教でありながら、韓国を除いてはどこにもその両足をおいていない。

また中国が根源となる東洋の思想は延々として持続しており、中国系人口は世界人口の四分の一を超過しているという点から見ても、現在、キリスト教はその制限性を克服できていない。

このような、世界宗教が中国大陸に入ってくるのができなかった立場に、共産主義が入ってきてこれを占領した。北韓も同じである。しかし、厳密な意味では共産主義も一つの宗教であると多くの人が主張しているが、この共産主義が人口分布と地域で見ると、極東の多くの部分を占領しているので、現代キリスト教が神の国を建設する真なる世界宗教となるためには、極東文化と調和しながら共産主義を克服し得るように改造されるべきである。そうでない限り、現代キリスト教は、人類を救援して地上天国を建設しようとする神の摂理の主役とはなり得ないのである。

事実上、共産主義が中国のための福音でないという証拠は、今日中国人自身によって提示されている。強力な共産主義ないしは社会主義の統制下においても、男児進好思想と家父長的権威主義的家族体制は中国社会にそのまま残っており、中国文化を変化させることはできなかった。またそれは中国の大衆社会建設と貧困からの脱皮にも貢献することができなかった。ドイツの理想主義哲学とカルヴィン主義の影響を受けたマルキシズムは、中

国に上陸してからわずか三十余年の間に、徐々に排斥されていたことをわれわれははっきりと見てとることができるのである。

このような事実は直ちに、極東の文化すなわち中国の伝統文化が、現代キリスト教をもってしても克服され得ず、また共産主義をもってしても克服され得ないことを実証している。従って、今や中国の伝統的文化とキリスト教の福音がよく融和された新しい福音、新しいキリスト教としての改造作業が必要とされているのである。

三 現代キリスト教の社会文化的当面課題

(1) キリスト教自体の革新

以上で、現代キリスト教の諸問題の根源が何かを診断してみたが、今までの内容を一言で要約すると、キリスト教は革新されるべきであるということである。キリスト教自体の革新がなくては、アジア共同体構想と宗教統一という膨大な課題を成就することはできない。

では、キリスト教の革新はどんな方向でなされるべきであろうか。世界文化は(皆地方的特色を持つてはいるが)、必ず西洋文化と東洋文化に分けて分析されている。従って、西洋文化において形成され成長したキリスト教の東洋哲学的解釈と、東洋思想の聖書的解釈が、感性と悟性で無理なく収容されるように再整理されるべきである。それは新しい価値観、新しい文化形成の原動力となり得る水準と方向に向かってなされるべきものである。故に聖書の個々の句節と表現にだけ縛り付けるのではなく、聖書全体に流れる神の摂理を、哲学と神学だけな

く、その他の社会科学の理論と方法論によって再構成し、地上天国建設の青写真としてのソーシャル・セオリーを提示する作業が必要なのである。

聖書の未完成性はイエス自身が指摘している。ヨハネによる福音書十六章十二、十三節で「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」と言われており、二五節では「私はこれらのことを比喩で話したが、もはや比喩では話さないで、あからさまに、父のことをあなたがたに話して聞かせる時が来るであろう」と言われている。

またウエーバー^⑩は、宗教の過程は人間を迷夢から覚まさせる過程にあることを指摘し、マジックは宗教的段階を経て科学的水準に到達する必然性を指摘した。ニーバー^⑪も「西洋の精神史において、人間存在は三つの継承的段階として理解されており、それは靈魂としての人間、人格としての人間、機能としての人間へと発展して、神のための奉仕者になる」と指摘している。

要するに、高度の科学時代に機能することができるよう、すべての文化が融合し得る方面に向けて、現代キリスト教の科学化が必要であると見るのである。

ここで再びデュルケム^⑫の言葉をしばらく借りてみよう。彼は哲学と科学が宗教から生まれたのを指摘しながら、その理由を、宗教は科学と哲学の代わりに出生したものであり、宗教は初期段階の哲学と科学であると主張した。なぜかといえば、宗教はわれわれの知的生活を支配する基本的な概念、すなわち時間、空間、階層、数、原因、

本質、人格、自然、生と死などのすべての基本概念を支配するために、科学の基本的概念は宗教から起源すると思ながら、宗教と科学の不可分離性を強調したからである。

(2) 社会統合機能の補強

現代社会は、急進的な都市化^⑬と産業化と西欧化の波によって極めて激しい解体現象を現しており、このような急激な社会変動と文化変動の中で人間は心理的、精神的、社会的不適応症に苦しめられ、そこではあらゆる社会問題が発生するほかはない。

しかし、いかに都市化と産業化が急速度に進行するとしても、社会を形成するいろいろなサブ・システムが釣り合って機能を果たすことができるならば、その被害を最少限度にとどめることもできるのである。社会解体の具体的な過程は、①諸サブ・システム間の競争(Competition)と葛藤(Conflict)②またはある特定のサブ・システムが他のサブ・システムよりオーバー・パフォーマンスするとか、アンダー・パフォーマンスするとき③また特定のサブ・システムや規範が過度に守られるとき——に急激に起こると見ている。

このような見地から、われわれはキリスト教が現代社会に入ってくることによって他のサブ・システムを補強するような機能の向上があったかどうかを問わざるを得ないのである。宗教の社会的役割の中の一つは、「社会衡平を維持」する機能であるが、現代社会における成長指向的経済価値の輻輳と政治的理念の横暴、二十世紀的社会変動過程での文化的機能の弱化などの渦中において、世界的宗教としてのキリスト教は、果たして十分な機能を果たし得たかを反省しなければならない。

ここで、社会統合の側面としては、機能的統合、規範的統合、コミュニケーションの統合を挙げているが、要するに現代キリスト教は、教派主義、個教会主義を指向し、超教派的な力と機能を統合して、他のサブ・システムに対抗し得るように、力を養わなければならない。そして緩んだ規範を再定立させることのできる現代的諸規範を創出する一方、すべての宗教人と非宗教人、すべての文化圏の現代人が互いに疎通し得る宗教的言語を、新しい啓示によって提示することができなければならないと見ている。

(3) 社会病理治癒の処方

現代社会の疾病は、二つの次元に区分して診断しなければならない。貧困、資源不足、暴増する人口、環境の破壊、食糧不足などは国家的次元に属する問題であり、離婚、青少年の犯罪および否定的な諸般離脱行動、人格の分裂などは家庭的次元の問題である。

以上の二つの次元から見て、現代社会が持っているすべての問題について、現代キリスト教は聖書の句節以上のことは一言も提供できないでいるのを否定する人はいないであろう。

国家的次元の問題に分類される諸般問題の根源が人口暴増にあるのにもかかわらず、保守的教派はもちろん、人口対策とは反対の処方提示しており、そうでない教派では継続して沈黙だけを守っており、現代キリスト教は環境破壊、資源の浪費、食糧不足などの人類生存の問題について全く処方を出していない。

それだけでなく、家庭的次元で惹起される諸般の問題に対しても、現代キリスト教は千九百年以前に書かれた聖書の句節以上の処方を出していないということは、大変深刻な問題である。

ハーヴェイ・コックスの説明を借りると、教会は神の前衛隊として、「ディアコニア」(Diakonia)的機能、すなわち都市の傷口を治癒する奉仕と、新しい社会の性格を提示して、人間都市を見えるようにする「コイノニア」(Koinonia)的機能と、社会の宣布的機能である「ケリュグマ」(Kerygma)的機能を代行しなければならないと提唱している。

このようなすべての機能を円満に遂行するために、現代キリスト教は、終末的社会(eschatological community)に実用される新しい時代の精神、新しい生活のスタイルを何時でも一足先に人類に提示し、未来指向的な神の倫理を提示することができなければならない。

(4) 唯物論の克服のための武器と行動

今日の世界は、大きく唯物論に基づいた共産主義社会と、唯心論に基づいた自由陣営とに二分されており、このことはまた、現代の人類の存亡を脅威にさらしている。故に「唯物論に基づいた共産主義は唯神論に基づいたキリスト教思想とは決して一致することができないということを鑑みて、キリスト教は共産主義との闘争に必ず勝利しなければならないという当為性を持つようになるのである。」¹⁷⁾

キリスト教の地上での究極的目標と終着駅が、地上の平和と人類の統一にあるとすれば、現代キリスト教はどのように二つの思想に分裂した世界を一つに統合し得る理論的武器を備えなければならず、その実行において積極的かつ主導的な行動をとらなければならないであろう。それは、共産主義に対する盲目的な反対でもなく、また資本主義や民主主義に対する一般的応援でもない。今こそ「一切の党派性を超越した統一の展望(unified

ここでデュルケムの言葉をもう一度想起してみよう。「すべての神は既にあまりにも年とっているかまたは既に死んでいる」という彼の診断は、単純な毒舌ではなく、宇宙を旅行する現代人にふさわしい新しい宗教の必要性を力説したものである。

われわれは今、二十一世紀の人類が納得して保持し得る宗教が、果たしてどこに現れ得るかを考えてみなければならぬ。現時点にさしかかっている。

世界の人々はその期待をアジアに向けているという事実は、あまりにも多くの人々たちによって指摘されている。エスカトロロジー(Eschatology)はたまたま末世と翻訳されてきたが、その本来の意味は「新しい秩序の発生」を意味しており、新しい秩序は新しい福音の誕生によって可能である。しかし「新しい」ものは数個が同時多発で発生するようなものではなく、「一つ」のものが「一つの時点」に「一つの地点」から発生するのだという事実に留意する必要がある。従ってわれわれは、まず第一にその「新しいもの」が何であるか、第二に「一つの時点」とはいつであるか、第三に「一つの地点」とはどの地点であるかということに特に留意しなければならない。

筆者は、その「新しいもの」とはまさに新しくなったキリスト教であると見るのであり、「一つの時点」とは今であると判断し、「一つの地点」とは、広いアジア全体というよりも、アジアの中のどこか一つの地域、特に世界の人口の四分の一以上を占めており、アジアの中でも重い比重を持っており、今まで世界的宗教を誕生させなかった極東のある「一つの地点」であろうと結論づけたいのである。従ってアジア共同体と宗教統一のための作業は、新しいものを提示することができると新しい指導者の擁立と、彼が提示する新しい道(福音)に従って人類が一つになるために努力することから出発しなければならぬと見るのである。そういう観点から見るととき、

Perspective) または全体的展望(total perspective)を提供することによって、すべての階層の利益と幸福を保障し得るキリスト教的イデオロギーの出現が要請されるのである。」¹⁴

キリスト教のイデオロギー的武装の当為性と必然性に対しては、既に統一思想研究院その他の諸機関で多くの労作を発表したので、ここではその詳論は略する。

二一 結論

歴史は不連続的連続の発展過程を経るといえることがしばしばいわれている。これは、精神世界と物質世界は同時に同じテンポで発展するのではなく、物質世界が発達すれば、それが一定期間を経て人間の精神を啓発して精神的発達を促進し、今度は発達した人間の精神が一定期間を経て物質の発達を促進するという意味であり、これを文化的遅滞(cultural lag)ともいうのである。

例えば、産業革命で物質が発達した後、自由、博愛、平等のフランス革命が後を追って起こり、このような精神的啓発が再び現代的な高度の科学文明を胚胎したのであるが、これが歴史発展の不連続的連続の例である。

現代社会は暴増の時代であるという。人口の暴増、情報の暴増、知識の暴増、技術の暴増がそれである。三百年の人類史において、これほどに急激な物質文明の発達と個々の社会および国際社会の激動を、人間はかつて経験したことがない。宇宙を往來する二十一世紀の人類のために、今日の世界的宗教、特に病んで無力となっているキリスト教が、どのような貢献をすることができかねば甚だ疑問である。

アジア共同体構想と宗教統一の必要性をだれが提唱したかについて関心を持つ必要がある。

註

- (1) Joseph Campbell, *The Masks of God Issues in Religion*, Allie M. Frazier (eds) (American Book Company, 1969).
- (2) En Frazier, op. cit. p.177.
- (3) Heinrich Zimmer, *The Meeting of East and West, Issues in Religion*, Frazier, op. cit. p.176.
- (4) Zimmer, *ibid.* p.182)の批判に關してもちろん筆者自身が完全に共感するのではない。
- (5) T. Parsons, op. cit. p. 445.
- (6) 本論考の序頭に紹介した句節、同じ章でデュルケムはヒューマニティの可能性を次のように叙述している。「永遠不滅な福音というものはないし、また人間が新しいものをつくり出せないと思ひ込む理由もな⁵⁾」
- (7) Clyde Kluckhohn, *Navaho Witchcraft*, Harvard University, Peabody Museum of American Archeology and Ethnology, Papers, Vol. 22, No.2 (1944).
- (8) これと関連させて見るとき、統一教会が主張する救済摂理の基本単位は神を中心とした四位基台であり、この四位基台は核家族ではなく大家族を意味している。キリスト教のすべての倫理を包容しながらも、東洋的な要素である家庭倫理に力点をおいている統一原理は、現代の社会問題の解決に大なる可能性を示してくれており、宗教としての具体的な社会文化的機能を持っていると見ることができ⁶⁾る。

- (9) T・パソンズも共産主義を類似宗教であると定義しており、「カルヴェイン」主義と驚くほど似ている⁷⁾を指摘した。Parsons, op. cit.p.444.
- (10) Max Weber, *Sociology of Religion* (Boston: Beacon, 1963).
- (11) Richard Niebuhr, 『キリストと文化』、宗教現象とキリスト教』宗教教材編纂委員会編、延世大学校出版部、一九八三)二九九頁。
- (12) E. Durkheim, op. cit., p. 21.
- (13) 国際連合は西暦二千年度に至って、世界人口の約五五%程度が都市化するようになることを推計している⁸⁾。
- (14) Clifford Geertz, *Religion, International Encyclopaedia of the Social Sciences* (Free Press, New York) Vol. 13, P. 403.
- (15) Harvey Cox, 『教会、神のアバンガル』op. cit. 宗教教材編纂委員会、pp. 238-249.
- (16) J. C. Hoekendijk, 李圭俊訳『散布する教会』大韓聖書公会、一九七五年。
- (17) 盧吉明『韓国社会の変動とキリスト教の役割、現代社会とキリスト教の主流』(一九八二年)、八八頁。
- (18) 孫大昨『現代社会のイデオロギーとキリスト教の本質』国際クリスチャン教授協議会、六二頁。